

會計報告

昭和四年度上田蠶絲專門學校同窓會經費收支豫算書

歲 入

豫 算		豫 算 說 明		(△ハ増ヲ示ス)		
款 項	豫 算 額	種 目	本 年 度 豫 算	前 年 度 豫 算	比 較	
					増 減	
一、會 費	二、六三五〇〇		二、六三五〇〇	二、四九〇〇〇	△一四五〇〇	
	通常會費		二、五六〇〇〇	二、四四〇〇〇	△一二〇〇〇	
	終身會費		七五〇〇	五〇〇〇	△二五〇〇	
		通常會費	二、五六〇〇〇	二、四四〇〇〇	△一二〇〇〇	會員六八%收入増加 ハ新會員ノ入會ニヨ ル
		終身會費成崩高	一〇〇〇	一〇〇〇	-	
		終身會費利子	六五〇〇	四〇〇〇	△二五〇〇	

歳出		豫算		豫算説明		比較		備考
款項	豫算額	種目	本年度豫算額	前年度豫算額	増	減		
一、事務所費	一、四一五〇〇		一、四一五〇〇	五八〇〇〇	△八三五〇〇			
俸給	一、〇五〇〇〇		一、〇五〇〇〇	二四五〇〇	△八八五〇〇			
合 計	三、八二〇〇〇		三、八二〇〇〇	二、九〇〇〇〇	△九二〇〇〇			
		前年度繰越金	五〇〇〇	五〇〇〇				前年度繰越金 見込額
	繰越金		五〇〇〇	五〇〇〇				
五、繰越金	五〇〇〇		五〇〇〇	五〇〇〇				
		一般寄附金	五〇〇	五〇〇				
		特定寄附金	五〇〇〇〇		△五〇〇〇〇			本會内規ニヨル特定 寄附當一人一〇圓五 十名ト見積ル
	審附金		五〇五〇〇	五〇〇	△五〇〇〇〇			

(△ハ増ヲ示ス)

				需要費															
				一五〇〇〇															
雜費	通信費	消耗費	備品費		旅費	旅費	賞與	傭人手當	雜給	書記給	專任幹事給								
二〇〇〇	五五〇〇	三〇〇〇	四五〇〇	一五〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	一五〇〇	一〇〇〇	二五〇〇	二五〇〇〇	八〇〇〇〇								
二〇〇〇	五〇〇〇	一〇〇〇	五〇〇〇	一三〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	一五〇〇	一〇〇〇	二五〇〇	二四五〇〇	一								
一	△五〇〇	△二〇〇〇	五〇〇	△二〇〇〇	一	一	一	一	一	△五〇〇	△八〇〇〇〇								
			什器書籍諸雜誌代		役員旅費		書記年末賞與			書記二名分	專任幹事一名分								

合計 三、八二〇〇〇

三、八二〇〇〇 二、九〇〇〇〇 △九二〇〇〇

弔慰金決算報告

(一)

故樋口琢磨氏弔慰金

金參拾錢	荻野 上風	堀田 啓次	富岡 泰	貞包 新	勅使用原保
金五拾錢	宮田 清義	堀田 啓次	北澤 茂	野崎 清	越智 岩平
	黒田誠一郎	荻原 孫三	野澤司馬作	田中 康雄	勝又 藤夫
	藤澤 千蔭	廣瀬 辰	土岡 光郎	小松 義夫	高田茂重郎
	坂田 榮雄	菊地 貞一	鈴木 誠一	小野 正男	松下 孝三
	新穂 利信	岸田 繁雄	瀧藤 文平	瀧澤 昌二	川村吉太郎
	香山 清和	小山 久一	山下 忠雄	安島 義久	中島 茂司
	竹内 清	山本 誠	塚田 祐春	櫻井 弘吉	山越 茂
	佐藤 一	大箸 政平	小林 憲政	鹽入 國治	依田寛之助
	平野 定男	桑田 庄七	塚田 鑰磨	坂本 孝子	頼本 啓一
	岸 善亮	牧野 春雄	岡本 榮一	荻野 俊一	小笠原喜代三
	水谷 郷一	西村敬之助	猿渡 兼光	佐藤 愛之	的場 小六
	樋村 忠義	石川 健丸	稻田 實	窪田 禎作	宮下 丈夫
	前澤 康雄	山岸 武	鈴木 教吾	岡島 米吉	中山 鑑一
			矢野 昌雄	倉橋 琢而	笠原 正巳
			小澤 勇	神保 喜久	土屋 勳
			横山 英一	稻生 得藏	結城 鑰男
			高橋 伊作	尾藤 省三	笹本 保雄
			柏倉 豊吉	松岡 潔	三浦 重雄

原田 侃 橋本 和夫 住藤 義助 鈴木 確七 宮澤 勇

矢澤茂登一 池田忠次郎 福島 新吾 野澤 泰治 鈴木 鍊一 齋藤 舍

古越 光明 兒玉 信尊 宮入 誠一 竹内五之助 二宮九二二 吉川 誠彦

齋藤 格次 新井宇之助 宮崎 秋雄 岡部 彌平 篠原 善次 小川 保

小口 一枝 黑江 文雄 竹内眞喜雄 小松 茂久 森 千城 宮川 繁治

坂田 正賢 小林 啓介 吉田 榮治 佐野忠二郎 佐野忠二郎 鎌谷 傳 小林 勳

石塚浪之助 村田 階宜 手塚 政吉 橋本 修二 武光 田浦 準 絹村 賈

笠原 重龜 西山嘉都治 佐々木峯二 後藤 仙彌 朝長 勝治 田中 正直 大館市治郎

岡 豊次郎 五島眞喜太 登坂 忠吉 田中 泰二 加々井精喜 田中 福雄 林 和夫

市川 清男 安部 和 刈田 恭一 大越 信 森戸 晋 庭屋雄治郎 吉澤 武夫

小林 消償 田附郎一郎 福島鋼治郎 竹内 虎夫 伊藤 清 伊藤 清 小山 庸人

小宮山太助 西山 諫治 福島鋼次郎 宮本 豊彦 中村 岩人 中村 岩人 山口定次郎

清水 清 井上 克己 大橋富次郎 氏家 忠次 依田 駒亮 依田 駒亮 佐藤 金六

小島 五郎 三好 彌市 深谷 正一 小林 貫一 手塚芳太郎 中島角太郎 竹内 善吾

大崎 征内 櫻井 吉利 久保田昌人 馬場 政友 菅野 三郎 菅野 三郎 小林 重男

廣井 俊一 中根 眞一 渡邊 晋吉 池田正五郎 小山 愚治 小山 愚治 淺野 清志

佐瀬 旭 藤崎 鑽 伊藤 勢龜 池田正五郎 仲内 靜 内山 吉哉 内川 勇

武井 光雄 田口 敏夫 内藤 良雄 仲内 靜 内山 吉哉 岩根 謙

濱 香三 田子 英人 宮西 憲二 中島 文雄 仲島 幸三

金壹圓五拾錢 瀨谷正男

岩瀬 三郎 井上兵一郎

金貳圓

小山田啓三 古山 宗八 内田訓之亮

中澤 薫
原 茂
須田國之助
武本 本治
松野 正一

中會根長男
山本辰五郎
福田銅之助
前田 龜雄
吉田 隆雄

古東 幹太
母袋 良平
古川 俊之
井上 泰市
宇田虎一郎

小松 庸
藤井 料
篠田平三郎
吉村 眞作
小笠原安爾

藤下友之丞
弓田 弘
原田 兵衛
湯川 秀夫
兒玉 忠雄

田角又十郎
若林 茂一
高島 秀男
矢島 良雄
濱井 壽夫

竹内 孝三
西本 朝平
栗原 茂
中島 茂
岡村 源一

大田愷一郎
上野 榮仁
梅澤厚太郎
門平潤一郎
根岸五之輔

土屋茂一郎
廣田雅六
平澤 勝
山本三六郎
芝 荒雄

石坂虎次郎
曾山 直高
渡部 齊
三橋 宣夫
芝 荒雄

小島 杉門
八木 誠政
松原幸剛太
石原 石司

林 貞三
窪谷謙三樓
菅生 俊興
專門學校官舎

窪田 清治
飯島 正胤
堀 忠太郎
倉澤 美徳

須田 圭二
北澤 周一
今村 良郷
中澤 勝也

高尾 歳次
森山 二郎
小林 繁

加美 好男
重山茂忠太
兄弟喜吉
上林多兵衛

山口 貞周
吉野 健香
相澤 寛一
栗原 悦
木脇 寅館

武藤 寛一
小林 茂樹
同窓會山陽支部代表土岡光郎
降旗 孝

彌原 克己
波崎 九如
阿部 丈夫
萩野 轍間

山崎 久三
堀 卓壽
居相 泰一

大石 卓壽
小見 益男
專門學校同窓會北信支部
慈勇會(養育科第五回卒業生)

金參圓

金四圓

金五圓

金拾圓

浦山 藤吉 尾見 祐八 栗原 章
 丸山 武夫 後藤 幸一 江頭 辰雄
 秋山 愛次郎 荒牧伊勢美 天田 晋三郎
 齋藤 鑿太郎 雜賀喜久三 弓田 弘
 岸野 潤一 峰村 壽命 白澤 幹
 式田定千代 日比野一夫 平井 洋一
 關田 九平 佐藤 國一 井出 滿藏
 永山 正秋
 練香壹箱 江頭 辰雄

合計……………六百七拾七圓參拾錢
 通信費……………拾七圓參拾錢
 差引遺族贈呈料……………六百六拾圓
 此ノ他

長野蠶業試驗場ノ鶴田定平、松村季華、金崎眞英、安川寛、北
 島正生、宮城博、ノ諸氏ハ試驗場職員一同トシテ又久保田正樹
 齋藤菊雄、宮澤勇ノ三氏ハ蠶業試驗場上田支場職員一同トシテ
 弔慰金ヲ送ラレマシタ。

(11)

故柳澤昇君弔慰金

金五拾錢 宮木 豊彦 山本 誠

金壹圓五拾錢 宮本 靜雄 田子 英人
 金壹圓 瀧澤 昌二 森戸 晋
 香山 清和 中島 茂
 (猿渡 兼光) 小山 恵治 大館市治郎
 (鹽入 國治) 宮西 憲二 山口定次郎 宮下 大夫
 島倉惣次郎 渡邊 晋吉 依田 彌亮 小山 哲夫
 渡邊 晋吉 岡 豊次郎 渡部 齊 内山 鶴雄
 合計……………貳拾七圓
 通信費……………六圓
 差引遺族贈呈料……………貳拾一圓

(12)

故鈴木俊彦君弔慰金

金五拾錢 宮本 豊彦 山本 誠 鈴木 雄七
 金壹圓 小山 恵治 頼本 啓一 大館市治郎
 宮西 憲二 橋本 和夫 島倉惣次郎
 小山 哲夫 渡邊 晋吉
 丙山 鶴雄
 合計……………拾壹圓五拾錢
 通信費……………五圓五拾五錢

差引遺族贈呈料

五圓九拾五錢

(四)

故植村秀男君弔慰金

金參拾錢 萩野 上風

金壹圓 牧野 春雄

野口新太郎

依田實之助

金貳圓 村島 徹

金五圓 河西 尙一

合計

差引遺族贈呈料

拾九圓參拾錢
拾九圓參拾錢

田中 秀吉

飯田 四郎

小山 俊吾

佐藤 一

坂路 善一

山本奈良三郎

小林 榮夫

編輯後記

編輯なんて奴は以前から計画的に決して出来るものでない。なんでも其の眞極へ来て所謂不眠不休でパタパタと片付けるべきものであるらしい。

第一原稿を集めるのにとてもの苦勞である。何度も何度も催促をして義理といふ欄に攻めつけ、嫌味やお叱言を云はれつゝ難有く丁殿する。夫れも大抵の場合は其の眞極でなければ殿けない。

實は斯く云ふ編者も亦其の眞極でなければ却々書かない。結局如何しても發行の眞極、匆忙の中に編輯をせざるを得ないといふ結果に墮するのである。

今回は丁度此の貴重な眞極へ来て、代議員會、講演會、を持ち込み、しかも是を本號へ登載しやうとしたから、一層忙がしくなつて了つた。發行の後れた理由と、杜撰な理由とを開陳すればザツトこんなわけである。

本號は割に説苑が少なかつた。實は此の方面の原稿が欲しいのである。特に勝木博士から有益なる原稿を御送り下さつた事に對して深甚の感謝を表する次第である。

學校と云ふものを成るべく同僚各位に想起して戴きたいと云ふ考へから憶想録の幾つかを集め、尙且つ新らしく學校がスウエルした個所の寫眞をも載せた。寫眞は悉く依田、竹内、山口、三氏の手を煩したものである。

滑り上げて見ると本號はいさゝか消極的に墮した感があつて、小見氏の所謂「相互の教育機關たらしむること」と云ふやうな積極的な使命を没却したかのやうに見える。更生してから未だ二才のいたいけない嬰兒であるから、教育の方針によつてはどつちにでもなる。如何かして一步進んだ積極的の理想に突進したいのであるから忌憚なき御批判と遠慮なき御叱諤とを願ひたい。そして原稿を御裏投下さらんことを切に冀つて止まない次第である。

世は十二月の寒空となつた。上田を繞る山々は已に白装をこらしめてゐる。本號が諸兄の手に入る頃は昭和四歳ももう眞近であらう。謹しんで舊新年の御送迎を祈り擲筆する。(三、一二、編者)